

中学校 国語

中学校国語科において、  
グループでの話し合い活動を充実させるための指導法の研究  
ー合意形成を目指した「指導プログラム」の作成を通してー

東北町立上北中学校 教諭 佐々木 敦彦

要 旨

本研究は、中学校国語科の「話すこと・聞くこと」領域の学習において、グループでの話し合い活動を充実させるための指導法について考察したものである。合意形成を目指した話し合い活動の指導において、話し合い活動の課題を解決する具体的な手だてを組み込んだ「指導プログラム」を作成し実践するとともに、「グループでの話し合い活動の手引」を作成し活用することにより、積極的に意見を出したり、より高められた意見にまとめたりすることができるようになった。

キーワード：中学校 国語 話すこと・聞くこと 話し合い活動 合意形成

I 主題設定の理由

学習指導要領の改訂において、国語科の指導については「実生活で生きてはたらし、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること」、特に「互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成すること」が重視されている。そのため、国語科における学習を通して、他教科等の様々な学習場面でも自分の考えや意見を互いに伝え合うことができる生徒にしたいと考えている。

ところが、生徒の現状を振り返ってみると、「言葉で伝え合う」ために必要な能力が十分身に付いているとは言えない。特に話し合い活動については、学校生活の様々な場面で行われているにもかかわらず、一部の発言できる者のみによって進められたり、安易な多数決で結論が下されたりと、充実したものにはなっていない。

そこで、言語活動の基本ともなる「グループでの話し合い活動」に着目し、話し合い活動を行う上での課題を克服するための指導方法を検討するとともに、各教科等で活用できるような話し合い活動の手引を作成して、充実した話し合い活動を行う能力を育成したいと考え、本主題を設定した。

II 研究目標

合意形成を目指したグループでの話し合い活動を行う能力を育成するために、生徒の実態や課題、小学校・中学校の指導の系統性を踏まえた「指導プログラム」と、他教科等でも活用できる「グループでの話し合い活動の手引」を作成し、中学校国語科の指導に生かすことが有効であることを、実践を通して明らかにする。

III 研究仮説

中学校国語科において、次のように指導することにより、合意形成を目指したグループでの話し合い活動を効果的に行う能力を育成することができるだろう。

- 生徒の実態や課題、小学校・中学校の指導の系統性を踏まえた上で身に付けさせたい力を焦点化し、それを指導する具体的な手だてを盛り込んだ「指導プログラム」を作成して指導する。
- 生徒が各教科等の実際の話し合いの中で活用することができる「グループでの話し合い活動の手引」を作成して、国語科の指導に生かす。

IV 研究の実際とその考察

## 1 研究における基本的な考え方

### (1) 「指導プログラム」の作成について

中学校学習指導要領解説国語編には、「話し合いは、情報の交換や意見の調整を通して新たな価値を創造したり、一定の合意を形成して物事を決めたりすることを目的として行われる」とある。そして、「話すこと・聞くこと」領域の第3学年における「話し合うことに関する指導事項」は、「話し合いが効果的に展開するように進行の仕方を工夫し、課題の解決に向けて互いの考えを生かし合うこと」である。これらのことから、課題の解決に向けて合意を形成する話し合いを行う能力を育成するための指導計画を作成する。

また、話し合い活動を効果的に行えない原因として、それまでの学習で既に指導したはずの能力が十分定着していないことが挙げられる。話し合うことについては小学校から基本的な指導が行われており、それを基に中学校での指導を重ねていかなければならないのだが、その積み重ねがきちんとできていないために、話し合いを行う能力が十分定着しないのである。学習指導要領解説には「国語科の指導内容は、系統的・段階的に上の学年につながっていくとともに、螺旋的・反復的に繰り返しながら学習し、能力の定着を図ることを基本としている」とあり、そのことを踏まえた指導過程の工夫が必要である。

そこで、話し合い活動に関する生徒の実態や課題、小・中学校の指導の系統性を踏まえた上で、単元の指導計画に、これまでの指導の不十分な点を改善する具体的な手だてを組み込む。その手だてを活用することによって当該学年の指導も行うことができるように工夫する。

このように、生徒の実態や課題、指導の系統性を踏まえ、身に付けさせたい力を焦点化し、それを指導する具体的な手だてを盛り込んだ指導計画を「指導プログラム」とする。これを実践することにより、効果的な話し合いを行う能力を身に付けることができると考える。

### (2) 「グループでの話し合い活動の手引」の作成について

話し合い活動を効果的に行えないもう一つの原因として、中学校が教科担任制であることが挙げられる。国語科においてどのような指導が行われているのかが他教科等の担当者に伝わらず、生徒に話し合い活動を行わせる際の手順や方法が担当者によって異なっているなど、指導の統一性が図られていないため、話し合いを行う能力がなかなか定着しないのではないだろうか。

そこで、生徒が各教科等の実際の話し合いの中で活用できる「グループでの話し合い活動の手引」を作成する。それを基に国語科で話し合いの手順や方法を生徒が学んだ上で、生徒も他教科等の担当者も話し合い活動で活用することにより、指導の統一性が図られると考える。

## 2 研究内容

### (1) 生徒の実態調査・教員アンケートの結果分析

#### ア 生徒の実態調査について

グループでの話し合い活動について、生徒の課題を明らかにして改善の手だてを考えるために、第3学年の生徒(97名)にアンケート調査を行った。

その結果、約6割の生徒は、話し合い活動の際に自分の意見をもてずにいると考えていることが分かった(図1)。

また、話し合い活動で積極的に発言していると自覚している生徒は約3割で、残りの約7割は自分から積極的に発言していないと考えていることが分かった(図2)。

さらに、グループでの話し合いを行う上で困ったことやうまくいかないと感じていることを、自由に記述する質問では、以下の3点が数多く挙げられていた。

- 意見を出すことができない。
- 話し合いを進めることができない。
- 意見をまとめることができない。

#### イ 教員アンケートについて

「グループでの話し合い活動の手引」を作成するに当たり、他教科等における話し合い活動の実態を把握するために、本校の教員18名を対象にアンケート調査を行った。一人の教員が担当教科や道徳、学級活動についても回答するため、延べ数は37となった。

その結果、教科では約3割、道徳や学級活動では5割が、グループでの話し合い活動を「ほとんど行わ

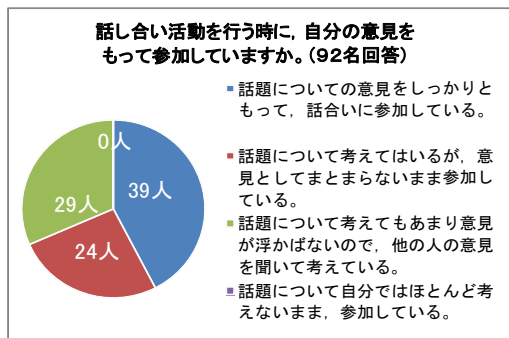


図1 話し合い活動時の意見について

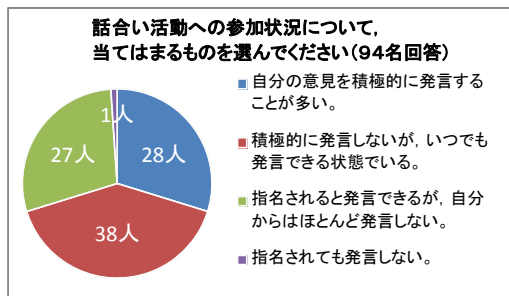


図2 話し合い活動への参加状況について

ない」と回答しており、各教科等において話し合い活動が活発には行われていないことが明らかになった（図3）。

また、授業で話し合い活動を行う上でうまくいかないことや困ることについて、「意見が出ない」と「意見をまとめられない」ことが多く挙げられた（図4）。

話し合いについては、生徒も教師も同じようなことを課題と感じており、これらを解決する手だてを「指導プログラム」に組み込むことにした。

(2) 小学校・中学校での「話し合うこと」の指導事項の確認

話し合い活動に関して小学校から指導してきた内容の中で、十分身に付いていない点を「指導プログラム」に盛り込むために、小学校と中学校の「話し合うことに関する指導事項」と、その教科書での取扱いを一覧表にまとめた（表1）。

その結果、意見を出すことや話し合いを進めることに関する指導は、小学校では低学年から段階的に行われており、それを生かすような話し合いの場が数多く設定されていることが分かった。また、中学校では小学校での指導を継続しつつ、多様な形態での話し合いが設定されていることが分かった。

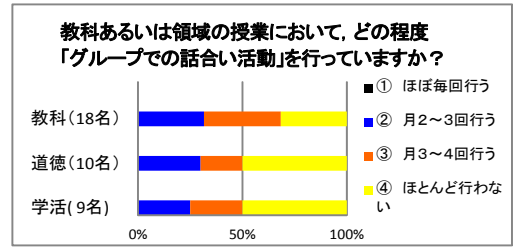


図3 話し合い活動の実施頻度

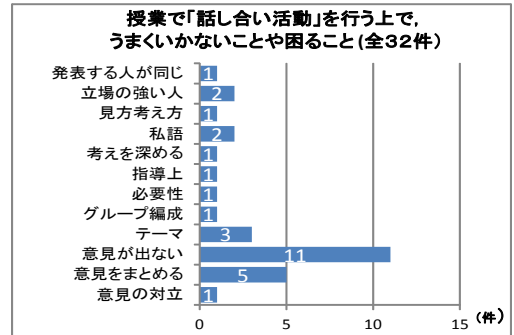


図4 話し合いの問題点

表1 小学校・中学校の指導事項一覧

話し合うことに関する指導事項	言語活動例	指導事項について	教科書5社から	再指導のポイント
小1・2年 オ 互いの話を集中して聞き、話題に沿って話し合うこと	イ 尋ねたり応答したり、グループで話し合っ て考えを一つにまとめたりすること	○話し手の方に顔を向ける。 ○うなずきながら聞く。 ○今後の展開を考える。 ○学習したことを振り返る。 ペア、小グループ、学級全体	○理由をつけて話す。 ○よく聞き質問し合う。	①相づち ②理由を述べる。 ③質疑応答
小3・4年 オ 互いの考えの共通点や相違点を考え、司会や提案などの役割を果たしながら進行に沿って話し合うこと	イ 学級全体で話し合っ て考えをまとめたり、意見を述べ合ったりすること	○司会や提案の役割を理解する。 ○考えの共通点や相違点を整理する。 ○いろいろな場面での司会や提案の内容・方法を学ぶ。 ○他教科とも関連付け多くの場を設定する。	○役割を踏まえ計画的に進行する。 ○話題から外れず前者の発言を受けて話す。	④共通点 ⑤相違点 ⑥役割 ⑦方向性
小5・6年 オ 互いの立場や意図をはっきりさせながら計画的に話し合うこと	イ 調べたことやまとめたことについて討論などをすること	○互いの立場や意図をはっきりさせ話し合いの計画に沿って進めていく。 ○自主的な形による話し合い活動の場を多く体験することにより徐々に指導内容を生かしていくようにする。	○議論の筋道に沿って根拠や理由をはっきりさせる。 ○討論の進め方・話し合いの 方法について理解する。	⑦立場や意図、計画に沿って説得する。
中1年 オ 話し合いの話題や方向をとらえ、的確に話したり相手の発言を注意して聞いたりして自分の考えをまとめること	イ 日常生活の中の話題について対話や討論などを行うこと	○話の要点をメモしたり必要に応じて質問したりしながら聞き取り、互いの共通点や相違点を整理することを通して、建設的な話し合いをする。 ○日頃から少人数での話し合いを行ったり、グループ学習などの際にも役割分担をするなど、既習の事項について様々な機会をとらえて習熟させていく。	○話題や方向をとらえて的確に話したり聞いたりする。 ○相手の発言等から自分の考えをまとめる。	⑧話題や方向をとらえる。
中2年 オ 相手の立場や考えを尊重し、目的に沿って話し合い、互いの発言を検討して自分の考えを広げること	イ 社会生活の中の話題について、司会や提案者などを立てて討論を行うこと	○社会生活の中から多様なとらえ方や考え方ができる話題を取り上げて司会や提案者などの役割を決めて話し合う。 ○司会は、討論が目的に沿って進むよう提案や発言の内容を整理する。 ○提案者は、提案理由や提案の趣旨を明確にするとともに、異なる立場の考えを想定して自分の考えを分かりやすく話す。	○相手の立場や意見を尊重する。 ○互いの考えを生かし合う。	⑨相手の立場や考えを尊重する。
中3年 エ 話し合いが効果的に展開するように進行の仕方を工夫し、課題の解決に向けて互いの考えを生かし合うこと	イ 社会生活の中の話題について、相手を説得するために意見を述べ合うこと	○「相手を説得する」とは話の内容を相手に理解させ、説得させることで、理解させるためには論理的に話す力が要求される。 ○相手に納得してもらうためには論理だけではなく、自分の考えを相手に受け入れてもらえるよう、第1学年の「A話すこと・聞くこと」(1)ウの「相手に分かりやすい語句の選択相手や場に応じた言葉遣いなどについての知識を生かして話すこと」も求められる。 ○根拠を明確にすること、強調して表現すること、適切な言葉で話すことなどが、説得力を増すことにつながることを気付かせる。	○話し合いの展開や進行を工夫する。 ○課題解決に向けて考えを生かし合う。	⑩課題の解決に向けて話し合う。

(3) 現段階で身に付けさせたい力の確認

「1 研究における基本的な考え方」でも述べたように、本研究では、課題の解決に向けて合意を形成する話し合いを行う能力の育成を図る。「合意を形成する」とは、「参加者が相互の立場を理解し、協力してそれぞれの考えを包含する一致点、それも安易な妥協ではなく話し合う前より一段高められた地点に達すること」（村松賢一，2001）と捉えた。

(4) 課題を改善するための手だて

(1)～(3)までを踏まえて、三つの課題を解決するための手だてを「指導プログラム」に盛り込み、実際の話し合い活動の中で手だてを活用した指導を行うことで、課題の解決を図ることにした。

各課題に対する具体的な手だては、次のとおりである。

- 意見を出すことができない。……ブレインストーミングを活用する。
- 話し合いを進めることができない。……「話し合いの手引」「進行カード」を活用する。
- 意見をまとめることができない。……マトリクス表を活用し、意見を高めながら合意形成を図る。

ア ブレインストーミングについて

先に述べたような課題を解決するために、グループでの話し合い活動にブレインストーミングを取り入れる。

ブレインストーミングはアイデアを広げるための話し合いとして、教科書（『国語3』光村図書）に掲載されている方法の一つである。中学校においては様々な形態での話し合いを行う必要があるが、話し合いにおいて案をたくさん出すことをねらいとして、思いついたことを自由に述べ、互いの案を否定しないことを約束とする。

今回は4名（または5名）で実施し、意見を付箋に記入してから発表することにした。書く行為を伴うことにより自分の考えを整理することができるし、意見を出しやすくなると考えたためである。さらに、付箋を2色用いて、個人で最初に出した意見とグループでまとめた意見を区別できるようにした。

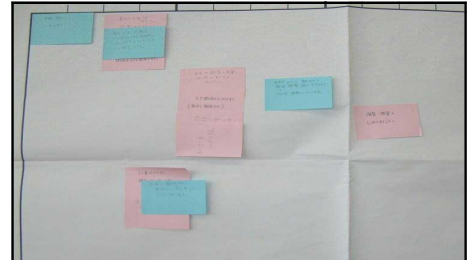


図5 ブレインストーミングで出した意見

イ マトリクス表について

マトリクス表は、『中学校国語科 国語力を高める言語活動の新展開』（田中洋一，2009）の言語活動の例にも用いられている手法であり、合意を形成するための手法として活用した。問題に対する二つ以上の着眼点を設定して、それを項目にした表にし、意見や情報を比較・分類する。出された意見を分析・整理するのに適した方法とされている。今回は、「期待される効果」と「実行の難しさ」を着眼点とし、それぞれを縦軸・横軸に設定して意見を分析させた。

話し合いの中で出された意見をまとめるには、比較する観点があることが大変有効であり、マトリクス表は二つの着眼点が示されるため意見の整理が行いやすい。また、話し合いの中で意見を改善し、より深めたり高めたりするためにも効果的な手法である。

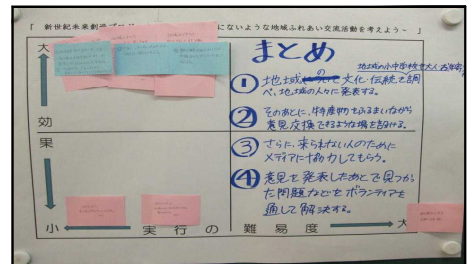


図6 マトリクス表を活用した例

(5) 「グループでの話し合い活動の手引」の作成

話し合い活動における三つの課題を解決するためには、国語科として生徒に指導することはもちろん重要であるが、他教科等において話し合い活動を行う際に、国語科での指導を踏まえて活動させることが重要である。

そこで、他教科等における話し合いの場面で活用することを前提に、図7のような「グループでの話し合い活動の手引」を作成した。

その内容は表2のとおりで、話し合いの目的、進め方や役割分担についてを基本にし、さらに、課題解決のために取り入れた手だてについても確認することができるようにした。

表2 話し合い活動の手引の内容

	項目名
1	「グループでの話し合い活動」で目指すこと 具体的に身に付けたい能力・態度
2	「グループでの話し合い」の進め方
3	進行役の役割
4	実際に話し合うときの言い方
5	個々の意見をより広げたり、深めたりするための工夫
6	全員の合意を形成するために

「グループでの話し合い活動」の手引き ～効果的に話し合い活動を行うために パス・セッションの活用～ Ver. 上中3年 2012	
組氏名	
1 「グループでの話し合い活動」で目指すこと	
グループで力を合わせて「合意」を形成する話し合いをすることが今回の目標です。「合意」とは、問題を解決する、よいアイデアを生み出す、何か決め事をするというだけでなく、グループのメンバーが相互の立場を理解し、協力してそれぞれの考えを積み込む一歩点、それも容易な段階ではなく、話し合う前より一段高められた地点に達することを表しています。	
場面	具体的に身に付けたい能力・態度
相手の話を聞くと	相手の話がテーマに合っているか（妥当性）や話が抜け落ちている点（欠陥点）がないかを聞きながら聞く。 細かい事例を聞き分けながら必要な情報を選別して聞く。 出された意見どうしの内容を分類しながら問題点を整理して聞く。
自分が話すとき	話の運びやつながり（論理関係）に気をつけたり、出された意見を整理しづらくなること。 聞き手の理解（伝わっているか）に応じて話し方を調整する。 話し合いの方向性を的確にとらえて、内容の深まる・まとまる方向で発言しようとする。 対立を恐れずよりよい合意形成に向けて建設的に発言することの慣れを知る。
話し合いを進めるとき	話し合いの進め方を見直しつつ出された意見を整理し位置づけながら、自分の考えを深める方向で話す内容を生み出す。 話し合いが深まるように別の見方を提案したり流れを転換させたりできる。 参加者へ平等に気を配り、多数決ではない形でみんなの意見をまとめる。

図7 「グループでの話し合い活動の手引」の一部

### 3 検証授業について

(1) 単元名 「話し合いを効果的に進めよう」～課題解決を目指す話し合いのしかたを身に付けよう～

(2) 指導計画

	主たる学習活動	指導上の留意点 ○評価
1	①普段の話し合いの様子やアンケート結果から、現在の課題や学習計画を確認し、単元全体の見通しを立てる。	・第3学年の指導事項に合わせて、第1学年の指導事項を復習することを説明する。
2	①話し合いの手引を活用して、バズセッションを行う。 ・ブレインストーミングを取り入れ、全員がより多く意見を出すことを考えて話し合いをする。 ・出された意見を内容ごとに分類して整理する。	・手引により、話し合いの目的・進行の手順・役割分担などを確認してから話し合う。 ○ブレインストーミングにより、多様な意見を出すことができたか。 ○共通点・相違点を整理できているか。
3 ・ 4	①前時の続きの話し合いを行い、それぞれの共通点から良さをまとめ、合意を形成する方法を考える。 ②前の時間にまとめた意見の付箋をマトリクス表に貼りその意見を更に高めたり広げたりする活動を行う。 ③これまでの学習を踏まえて、話し合いを行いその取組みを振り返る。	○それぞれの意見の良い点を共通点としてまとめ、妥協点を見付けて合意形成ができているか。 ・付箋の位置付けの理由を説明できるようにさせる。 ○意見をまとめたり「難易度は低いが、効果の高い」意見を新たに考えたりできたか。 ○手引等に従い、話し合いを最後まで進められたか。
5	①単元の学習全体を振り返り、話し合いに必要なことをまとめる。	○これまでの学習からポイントをまとめているか。

### 4 考察

(1) ブレインストーミングの効果について

「意見を出すことができない」という課題を解決するためにブレインストーミングを取り入れ、付箋に書いてから発表することにした。その結果、ほとんどの生徒が何らかの意見を出していた。

そこで、話し合いの記録用紙やブレインストーミングの際の付箋の数によって、出された意見の数の変化を調べた。単元の学習前の国語の授業における話し合い活動（単元前）と、単元の第2時に行った話し合い活動（指導Ⅰ）と、第4時にまとめとして行った話し合い活動（指導Ⅱ），それぞれの中で出された意見の数を比較したものが図8である。

それぞれの話し合いのテーマは、次のとおりである。

- 単元前……「国民の休日（祝日）を増やすとすれば何の日がいいか？」
- 指導Ⅰ……「上北中学校をもっと良くするために、1・2年生に取り組んでほしいこと」
- 指導Ⅱ……「新世紀未来創造プロジェクト～これまでにないような地域ふれあい交流活動を考えよう」

その結果、単元前に比べて指導Ⅰの意見数は、平均で各班五つ程度意見が増えていた。ところが、指導Ⅱでは意見数としては単元の指導前の話し合いの意見数より一つ少なくなっていた。

このことから、次のようなことが考えられる。

まず、指導Ⅰでは、数多く意見を出すことを意識して書いたため、意見数が増加したものと思われる。付箋に書いて発表することによって、抵抗なく意見を出せたようだ。ブレインストーミングは、普段の話し合いで意見を出すことができていない生徒にとっては有効な方法だったと言える。

次に、指導Ⅱで数が減った理由として、それぞれの生徒が自分の意見を精選したことが考えられる。指導Ⅰで話し合いの方法を理解し、1単位時間内に結論まで出さなければならないことや、マトリクス表により意見の整理をすることが分かっていたので、単に数多く意見を出すのではなく、自分の中である程度意見を精選して発表したのではないかと考えられる。

(2) 話し合いの内容について

「指導プログラム」による指導によって、話し合い活動における課題が改善され、合意を形成するための話し合いができるようになったかを検証するために、各グループの単元前の話し合いと指導Ⅱの話し合いの様子をビデオ撮影して比較し、分析した。表4・5は、ある班の発言内容を記録したものである。

表4では、ブレインストーミングによって出されたいくつかの意見を、マトリクス表の着眼点を基に検討し、付箋の位置を貼り替えながら検討していることが分かる。

また、表5では、話し合いの目的に照らして更に検討を進め、出された意見を発展させようとしていることが分かる。複数の意見を併せて一つにまとめたり、意見を関連付けて合意につなげたりしている様子が見えてくる。

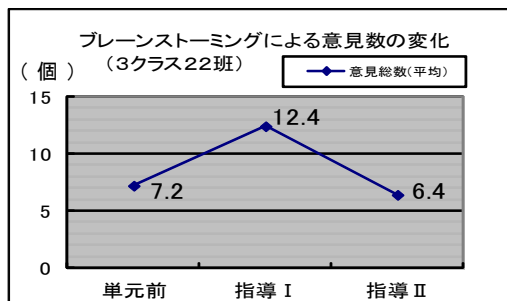


図8 話し合いで出された意見の数の平均

表4 話し合いの具体的な発言内容①

K 「次、上中祭で東北町の有名なこととかをやる。何？有名なこととかって？」  
 MI 「なんか伝統みたいなの。」  
 K 「これ？発表するってこと？でも、上中祭だよな。」  
 MI 「なんか地域の人に来てもらえる発表会みたいなのので、なんか教えてもらったことをするみたいなの。」  
 K 「なんかこれに対してないですか？... 上中祭とかで町の... これ難易度は？」  
 MA 「これを... 難易度低いんじゃないの？」  
 K 「上中祭でやればいからね。」  
 MA 「うん。」  
 K 「効果は？」  
 MI 「う～ん、普通。」  
 MA 「来た人しかあれじゃない。」  
 MI 「そうだね。」  
 K 「こんな下で... ???? (中央に付箋を貼る。)」  
 MA 「あと、地域で交流とはならないと思う。」  
 K 「ならないね... ならないね... ちょっと待って。」  
 (左下に付箋を移動して貼る。)  
 K 「秋祭りみたいに地域の人に伝統みたいなのを教えよう。」  
 MI 「笛ね、笛とか太鼓とか。」  
 K 「限定になるんだね、全員交流にならないね。」  
 Y 「うん、効果あんまないね。」  
 MA 「確かに。」  
 K 「その祭りに関係する人とかそういう伝統に関係する人だけとしか交流できないよね。」  
 MI 「はい。」  
 K 「・・・」 (付箋を貼る。)

表5 話し合いの具体的な発言内容②

K 「時間がないから。他にありますか。より良く、さらに、これを発展。」  
 Y 「でも、これってさあ、課題っていうか...」  
 MA 「これってさあ、発表と料理のやつを付け足せるんだったら、こっちも付け足せるんじゃない。」  
 MA 「掃除終わったあとに何かすれば。」  
 K 「それだ。それはいいと思う。」  
 Y 「計画的になってきた。」  
 MA 「掃除... 確かに計画性になってる...」  
 MA 「でも、掃除メインにしなきゃいけないだよな。」  
 K 「いいでしょ。交流が目的なんだから。」  
 MA 「まず、掃除をします。」  
 Y 「ボランティア活動でいいんじゃない。」  
 K 「じゃあ「町内のためにボランティア活動をする」で、(掃除)。」  
 Y 「ここで見つかった課題とかをボランティア活動としてしたりする。」  
 Y 「発表とかでさあ、出てきたことを。」  
 MA 「こっちからこっちじゃなくて？」  
 Y 「こっちからこっちってどういうこと？」  
 K 「こっちからこっちでしょ。」  
 MA 「掃除してダメだったところを発表するじゃなくて？」  
 K 「じゃなくて、調べて発表する上で問題点をボランティアで解決するってこと。」  
 MA 「つながってくるね。じゃあ。」  
 K 「④だね。」  
 MA 「④そっちに書きたい。」  
 K 「発表や意見の中で見つかった問題をボランティア活動などをすることで解決する。」  
 MA 付箋を書く。

(3) 他教科でも活用できる「グループでの話し合い活動の手引」の効果について

「話し合いを進めることができない」という課題を解決するために取り入れた「グループでの話し合い活動の手引」を活用して、分かったことや参考になったことについてアンケートを行った。

図9のように、分かったことや参考になったこととして多かったのは「グループでの話し合いの進め方」である。話し合いそのものの流れや手順を確認する上で参考になったと思われる。また、「意見を広げ深める工夫」(ブレインストーミング)が多いが、これについては手引の内容として参考になったのではなく、ブレインストーミングの手法そのものが参考になったためと思われる。

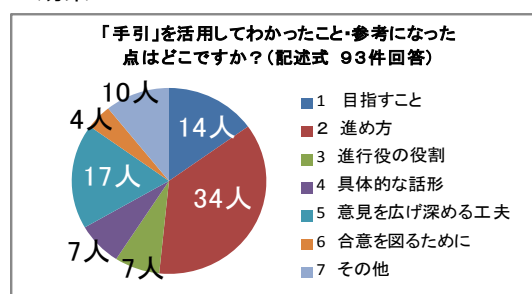


図9 手引の活用について

V 研究のまとめと課題

1 研究のまとめ

- 積極的に意見を出すことができないという課題に対し、ブレインストーミングの手法を取り入れ、付箋に意見を書いて発表することにより、生徒から出された意見の数や質において向上が見られた。
- 意見をまとめることができないという課題に対し、マトリクス表の手法を取り入れることにより、出された意見を検討し、組み合わせたり意見に新たな要素を付け加えたりする様子が見られた。
- 話し合いを進めることができないという課題に対し、「グループでの話し合い活動の手引」を作成し、実際の話し合い活動で活用することに関しては、主に話し合いの流れや手順を確認することに役立った。しかし、その他については、話し合いの場面では、時折見る生徒がいる程度であり活用されなかった。

2 研究の課題

「グループでの話し合い活動の手引」については、生徒が話し合い活動の際に活用するだけでなく、国語の授業で活用したり他教科等の担当者が参考にしたりすることも意識して作成したため、内容が多くなり、活用しにくいものになってしまった。それぞれを別の手引として、内容を精選して作成する必要がある。

<引用・参考文献>

村松賢一 2001 『対話能力を育む話すこと・聞くことの学習』, p.177, 明治図書出版  
 田中洋一 2009 『中学校国語科 国語力を高める言語活動の新展開 「話すこと・聞くこと」編』  
 東洋館出版社